

聖書：士師記7：1～25

説教題：三百人で救う

日時：2014年4月13日

主はミデヤン人からイスラエルを救うために、第5番目の士師ギデオンを立てて下さいました。このギデオンは、もともと強い人でも勇敢な人でもありませんでした。彼は私たちと同じく臆病なところもあれば、後ずさりするような面を持っている人でした。しかしそんな彼が主の励ましを受けて、この7章でミデヤン人との戦いに向かって行きます。

さて、イスラエルがミデヤンに向かって陣を敷いた時、主からの驚くべき言葉がギデオンに下ります。それは「あなたといっしょにいる民は多すぎる」というものです。12節に示されていますが、ミデヤン人はいなごのように大ぜい谷に伏しており、そのらくだは海の砂のように多くて数え切れないほどでした。また8章10節から敵の兵士は13万5千人であったことが分かります。それに対してイスラエルは、3節から分かりますように、全部で3万2千人でした。「13万5千人」対「3万2千人」。イスラエル軍は明らかに劣勢です。なのに主は、多すぎるから減らすと言われ、「恐れ、おののく者はみな帰りなさい。」とギデオンに言わせます。するとどうなったでしょう。イスラエルの民の内、2万2千人が帰ってしまい、残りは一万人にまで減ってしまいます。

しかし、主は「まだ民は多すぎる」と言われます。次に主が命じられた方法は、残った一万人を水のところに連れて行き、水の飲み方で兵士たちをより分けるといいます。すなわち膝をついて犬がなめるように水を飲む者と、膝はつかずに手ですくって水を飲む者とに、です。そして主は手ですくって水を飲んだ者だけを残すように、と言われます。その結果、残されたのはたったの300人でした！3万2千人から主は300人にまで減らしてしまわれた。果たしてこれでどうやって13万5千人もの敵と戦えるのでしょうか。

ある人は、なぜ手ですくって飲んだ人は残され、犬がなめるように水を飲んだ人は帰らされたのかと問います。そして何らかの意味で手で水をすくって飲んだ人の方が主のテストに合格した優れた兵士であると見ようとしています。そのために良く言われる説明は、膝をついて水を飲む兵士は不注意な兵士であるということ。それでは敵に不意に襲われた時に対処できない。一方、手ですくって水を飲む人は、周りの状況に目をやりつつ、気をつけて飲む人たちである。主はそのような用心深い性質をここで試されたのだ、と。しかしこうして主が精鋭たちを残されたと見ることは、これから見るこの章のメッセージに逆行します。むしろこれは単なる数減らしの方法であったと見るのが良いと思います。確かに4節に「試す」という言葉がありますが、新共同訳がここを「えり分ける」と訳しています。言いたいことは数をもっと少なくするということです。

主はなぜこのようなことをされたのでしょうか。その理由が2節にあります。イスラエルが「自分の手で自分を救った」と言って、主に向かって誇らないためです。私たちは自分の生活がうまく行くと、こう考え始めます。これは私のおかげだ。私が良くやったからだ、と。私たちはそのことで神に感謝の祈りをささげるかもしれません。しかし心の深いところでは、この結果に至ったのは、何と言っても私のせいだ。私の努力、私の熱心、私の行動、私の頭の良さ、

…。そうして自分に栄光を帰す傾向が私たちにはあるでしょう。主はそれを良しとはされないのです。そのために主は、私たちが自分を見る限り、全く望みが持てないような状況に置かれることがあるのです。それは私たちが主により頼み、主に強くされて事をなし、主に栄光を帰す者へと導かれるためです。

さて、心細い集団となったギデオンに、主は9節で「立って、あの陣営に攻め下れ。」と言われます。しかしこうも言われました。10節と11節前半：「しかし、もし下って行くことを恐れるなら、あなたに仕える若い者ブラといっしょに陣営に下って行き、彼らが何と言っているかを聞け。そのあとで、あなたは、勇気を出して、陣営に攻め下らなければならない。」すでに何度も主がともにいてくださるしるしを頂いていたギデオンでしたが、いなごの大群のようなミデヤン人を前にして、なお手足がすくむような状況があったのでしょうか。しかしここに主の素晴らしいお姿があります。それは主はご自身のしもべの恐れを知っていて下さるということです。主は本来こう言っても良いのです。「わたしはすでに何度も、敵をあなたの手に渡したと言ってきたのではないか。なのに、お前はまだ恐れているのか。そんなに弱者では使い物にならないな。」しかし主は私たちの肉の弱さを心に留めて下さり、忍耐して私たちのレベルに降りて来て下さるのです。そしてギデオンに、ならばまず下って行ってミデヤン人が何と言っているか、聞いてきなさいと言われます。そのあとであなたは勇気を出して戦わなければならない、と。

そう言われてギデオンが行ってみて聞いた話が13節と14節です。「ギデオンがそこに行ってみると、ひとりの者が仲間に夢の話をしていました。ひとりが言うには、『私は今、夢を見た。見ると、大麦のパンのかたまりがひとつ、ミデヤン人の陣営にころがって来て、天幕の中にまで入り、それを打ったので、それは倒れた。ひっくり返って、天幕は倒れてしまった。』すると、その仲間は答えて言った。『それはイスラエル人ヨアシュの子ギデオンの剣にほかならない。神が彼の手にミデヤンと、陣営全部を渡されたのだ。』」大麦のパンとは、貧しい人々の一般的な食べ物のものであり、ここでは弱いイスラエルを象徴しています。一方天幕はミデヤン人の天幕を指します。パンがころがって来て天幕をひっくり返すというのは実際にあり得ない話です。しかしミデヤン人は、自分たちは必ず打ち負かされるだろう、とすでに戦う前から心がしなえ、パニック状態にありました。心がこのように萎縮しているなら、勝負はすでに決まっているようなものです。ギデオンはこのことを聞いて、すぐに主を礼拝します。そしていよいよミデヤン人の陣営に攻め下ることになるのです。

私たちはここに改めて、神はどんな人を用いられるかについて学ぶのではないのでしょうか。私たちは神のしもべと言うと、確信に満ちている人、自信がある人、恐れがなく、冒険的なことにもチャレンジする人、などを思い浮かべるかもしれません。そして自分もそういう人間でないと神に用いられないと考えやすい。しかしここにいたギデオンは全く反対です。彼は目の前の状況に不安と恐れを抱いていた人。気が動転しそうな状態にある人でした。しかし主はそういう彼を用いてくださったのです。ヘブル書11章には「信仰の勇者」のリストがあり、そこにギデオンの名前も出て来ますが、その彼らについて34節には「弱い者なのに強くされ」と記されています。彼らはみなもともと弱かったのですが、ただ主によって強くされたのです！ですから私たちにとっても大切なことは最初から強いことではなく、主によって強くされ

ることです。主はこのギデオンのエピソードに示されているように私たちの弱さを理解し、慮り、励まして下さるお方なら、どうしてこの私に限っては、いくら主でも強くすることは不可能だと言えるでしょうか。主は弱い私たちも強くし、用いることができるのではないのでしょうか。

ギデオンはこうして勇氣 100 倍となって戦いへと進みます。彼は 300 人を三隊に分け、全員に角笛とからつぼを持たせます。角笛はここでは大量のノイズを出して相手を威嚇し、圧倒するための道具です。からつぼは敵陣に近づくまでたいまつを隠し、打ち壊す時に大きな音を出すためのものです。そして彼らは合図を受けて「主のため、ギデオンのため」と叫ぶようにと指示されます。14 節にあるように、ミデヤン人はイスラエルにはギデオンという神のしもべがいて、その彼によって主は自分たちを打ち負かすだろうと考えていました。そんな彼らに「主の剣、ギデオンの剣」という叫び声が聞こえるほど、パニックをもたらす言葉はありません。そうして近づく、敵陣ではちょうど番兵の交替をしたばかりでした。主が与えてくださったグッドタイミングです。この時にギデオンは作戦を執行します。

一斉に吹き鳴らす角笛の大きな響き、一度に割れるからつぼの大きな音、暗やみに突然パッと燃え上がるたいまつを炎、そして全員が叫ぶときの声…。ミデヤン人たちはイスラエル軍が大挙して襲撃して来たことと錯覚してパニックとなり、闇の中で同士討ちを始めます。イスラエルは何もしていないのに、彼らが勝手に自滅し始めたのです。そしてミデヤン人は大混乱の内に南方へ敗走します。23 節に記されているイスラエル人は先に帰った人々でしょう。彼らはイスラエルが圧倒的な優勢に立っているのを見て戦いに急遽加わります。ギデオンはさらに南方のエフライムにも戦いを呼びかけます。その結果、南へ下っていったミデヤン人は挟み撃ちに会い、壊滅状態に。そしてミデヤンの二人の首長オレブとゼエブの首が取られ、決着がつきます。わずか 300 人で、いなごの大軍のようなミデヤン人が打ち負かされたのです。

以上の士師記 7 章は私たちに何を教えているのでしょうか。それは「弱さの必要性」ではないのでしょうか。私たちが強い時、私たちは自分の力に頼り、自分に栄光を帰し、主から栄光を奪い取ってしまいます。しかし私たちが弱い時、私たちは本当の意味で主により頼むように導かれます。そしてただ主の力によって事をなし、主に栄光を帰すように導かれます。その祝福に生かされるために、弱さはむしろ必要とさえ言えるのです。

思い起こされるのは 2 コリント 12 章のパウロの言葉でしょう。パウロには肉体に一つのとげがありました。彼としては、それが無い方が自分は主のためにより良く働けると考えていた。だからどうかこのとげを取り去って下さい、と彼は何度も主に願った。ところが主のお答えは、「わたしの恵みはあなたに十分である」というものでした。その意味は、あなたはその弱さを持ったままで強くなれるということ。あなたのその弱さを補って余りあるほど、わたしは十分な恵みをあなたに注いで、あなたを豊かに用いることができる。私たちの弱さは私たちが自分に頼れないことを自覚させられ、主にこそより頼むようにと教えてくれる補助手段となるものです。もし私たちが弱いところがない完璧な人間だったらどうでしょう。きっと神様に頼らなくなるでしょう。そして自分では気がつかなくても、言動の端々で常に自分を誇る高慢でいやな人間になることでしょう。しかし私たちは弱いところを持っているので、主に頼ることへ導かれるのです。ですから私たちが持つ弱さは実は軽蔑すべきものではなく、むしろ私たちに神

の祝福へ連れて行ってくれる友達のようなものです。それは神の恵みが入ってくる入口となる
ところであり、主を信じる者にとって弱さは強さに変わることができるのです。パウロが言う
ように、「私は弱い時にこそ強い」という不思議に私たちも生きることができるのです。

この世の中では弱かったら置いて行かれます。弱肉強食の世界では、弱いことは終わりを意
味します。しかしクリスチャンは、むしろ弱い時にこそ、本当の強さを知る世界へと導かれる。
私たちが必要としているのは共にいる兵士の数でなく、また目に見える安心材料でもない。必
要なのは主に対する私の信頼であり、信仰です。様々な問題や弱さに直面する時、下を向いて
うつむくのではなく、今この時こそ主に頼る絶好の機会ととらえて主に近づくことができます
ように。そして弱い者なのに強くされ、私たちの思いを超えた導きを上から頂いて、主にすべ
ての賛美と栄光を帰す信仰者の幸いと強さに生かされて行きたい思います。